書　　評

United Nations, *The Population Debate: Dimensions and Perspectives*, Papers of the World Population Conference, Bucharest, 1974, Volumes 1 & 2

本書は書名の副題にも記されているように，1974年8月，ルーマニアの首都ブカレストで開催された第3回世界人口会議のために準備された報告（background papers）と文書の集大成である．全2巻の総頁数は1,400頁に達しており，第1巻は第1～4部，第2巻は第5～9部に分かれ，付論としてⅠ～Ⅳがつけ加わる．各部の内容はつぎのごとくである．

第1部（報告数5）は，人口論争―その要約―と題して，会議事務局が提出した4報告と会議で採択された「世界人口行動計画」(World Population Plan of Action）の全文とが含まれる．4報告の題名は「最近の人口すう勢と将来展望」，「人口変動と経済社会発展」，「人口，資源，環境」，「人口と家族」であつて，これは会議が組織した3つの委員会の主題に見あっている．したがってその内容も会議全般の目的や問題点を概観するのに便利である．

第2部（報告数11）は，「世界の人口事情と見通し」であって，人口変動，出生力，死亡，国際移動，労働力，教育人口にわたって，現状と将来予測とが報告されている．提出者は国連事務局，ＩＬＯ，ＵＮＥＳＣＯ，ＥＣなどの公的機関が中心であるが，G. J. Stolnitz（死亡）や A. J. Coale（人口転換）などの報告も含まれる．

第3部（報告数3）は，「人口データの集収，人口調査，訓練」を取りあげ，第4部（報告数26）は，「人口と開発」を主題として，人口変動と経済社会要因との関連の問題を広汎に扱つている．内容としては歴史的展望にはじまり，食糧，農業，労働力，所得，教育，健康，栄養，寿命など多くの個別課題が取りあげられ，地域的にはとうぜん発展途上地域にかなり重点がある．個人論文としては S. Kuznets. F. W. Notestein. A. Sauvy などの名が含まれる．

第5部（報告数23）は，「人口，資源，環境」であるが，個別課題として，土地，水資源，食糧供給，エネルギー，環境破壊，居住パターン，都市・農村人口分布など多彩な項目が取りあげられて，実態の政策とモデルが論じられている．個人報告が多く，L. R. Brown, P. R. Ehrlich, J. J. Spengler, H. Hyrenius などの論文がある．

第6部（報告数10）は，「人口と家族」を取りあげ，家族循環，再生産行動，社会・文化パターンなどを主題として，M. B. Conception, R. A. Easterlin, N. B. Ryder, C. F. Westoff などの報告が含まれる．

第7部（報告数13）は，「人口と人種」である．ここで人種は出生力，家族計画，国際人口移動，教育，健康といつた問題との関連で論じられており，地域としてラテン・アメリカ，アフリカ，西アジア地域およびソ連邦からの報告が含まれる．

第8部（報告数10）は，「家族計画」となる．出生力や健康との関連のほか，組織普及活動，法津の問題に重点があり，ＷＨＯ，ＵＮＥＳＣＯ，世界銀行の報告を含んでいる．

第9部（報告数6）は，「人口政策およびプログラム」であるが，国連事務局と国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）が各2つの報告を出しており，人口分野における活動の意義，役割を論じている．

付論のⅠ～Ⅳは，人口と経済社会要因の複雑な相互関連を認識するために，世界人口会議に先立つて1973～74年に開かれた4つのシンポジウムの報告であり，また本書に含まれた個人報告分もすべて，この4つのシンポジウムに一度提出されたものである．その点で先行シンポジウムが重要な役割を持ったことになるが，本書によつて，それを含めて世界人口会議の全容を概観することができる．　（濱　英彦）